

かわりゆく時代
かわらない心

— 明治の言の葉 —



日本人の「徳」ってなんだろう

私たち日本人が遠い祖先の時代から大切にしてきた、優れた品性や道徳意識などの「徳」。

どんなに時代が移ろうとも、その普遍性は決して失われることなく、人々の心の中に連綿と受け継がれてきました。

平成三十年は明治改元から一五〇年の節目にあたります。

日本の歴史上、大きな転換期となった明治維新！。

時代の大変革を成し遂げる立役者となった志士たちは、迫りくる欧米列強を前に国の未来を真摯に見据え、誇りある祖国を守るために強い信念をもって行動を起こしました。

しかし急速な近代化・欧米化が進むにつれ、本来守り継がれるべき日本古来の徳は、ややもすれば疎かにされがちな状況となっていました。

このことを深く心配された明治天皇は、国民道德の大本を示すために教育勅語を渙発されました。教育勅語には、私たち日本人が未来永劫語り継ぐべき「十二の徳目」が記されています。

志士たちが重んじた「徳」と、教育勅語に掲げられた「徳」。

維新の先人が遺した言葉を紐解き、その気概に思いを致すことは、混迷する現代社会を生きる私たちの道標となるでしょう。



孝弟は是れ終身の工夫なり

—— 親孝行と兄弟姉妹が仲良くすることは、
生涯心得ておかなければならない ——

佐藤一斎



佐藤 一斎〔さとう いっさい〕 安永元年-安政6年(1772-1859)
江戸後期の儒学者。西郷隆盛が愛読し、人生哲学の核としたことで知られる『言志四録』を著す。
『言志四録』…『言志録』、『言志後録』、『言志晩録』、『言志叢(てつ)録』の四書の総称。

少子高齢化や過疎化、核家族化など、多様化する社会の中で家族のあり方は大きく様変わりしてきました。また昨今では、家庭内暴力や家族・親族間における殺傷事件、孤立死などが痛む事柄も多く見受けられます。

江戸後期の儒学者・佐藤一斎が著した『言志四録』^{げんししよく}は、勝海舟や吉田松陰など明治維新のさきがけとなった人物に影響を与えとともに、維新の英雄・西郷隆盛が愛読したことも著名です。

一斎が残した言葉は、一五〇年以上を経てもなお私たちの心に響きます。親から子へ、子から孫へ…。

私たちは家族が紡ぐ歴史の中で、先祖から脈々と続いてきた「命」のたすきを受けて生きています。

自分を生み育ててくれた親に感謝し、兄弟姉妹や夫婦が仲良くすることは、円満な家庭生活を築くための素地であり、互いに支え合う社会の実現に向けた足掛かりとなるでしょう。

孝行 親に孝養をつくしましょう

友愛 兄弟・姉妹は仲良くしましょう

夫婦の和 夫婦はいつも仲むつまじくしましょう



人は己れに克つ^{かつ}を以て成り、
自ら愛するを以て敗るる

——人は自分に打ち克つことによって事を成し、
自分本位に考えることによって失敗する——

西郷隆盛



西郷 隆盛(さいごう たかもり) 文政10年-明治10年(1827-1877)
薩摩藩士で幕末維新期の政治家。明治維新の立役者で、戊辰戦争では江戸城の無血開城を実現した。

人は誰しも自分ひとりでは生きてゆけません。

家族や友人、学校の先生、職場の同僚や先輩後輩など、多くの人から支えられる中に「自分」というひとりの人間が存在しています。

維新三傑の一人・西郷隆盛は、自己修養において大事なのは「克己^{こくしん}心」だと説きました。

人は成功や名声を得るにつれて気持ちにほころびが生じやすく、自らの力を過信^{おごしん}して驕り高ぶるようになる恐れを指摘しています。だからこそ常日頃より自らを戒める^{いませし}ことが重要なのです。

自己と向き合い他者への思いやりをもつことは、友との友情を築くだけでなく社会的な信頼関係を構築してゆく上でも欠かせません。

自らの立ち居振舞いを省みること、誰にでも謙虚に接する心、周囲に支えられることへの感謝の念をいつまでも大切にしたいものです。

朋友の信

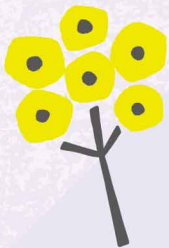
友だちはお互いに信じあつて付き合ひましょう

謙遜

自分の言動をつつしみましょう

博愛

広く全ての人に愛の手をさしのべましょう





学は人たる所以ゆえんを学ぶなり

—— 学問とは人間はいかにあるべきか、
いかに生きるべきかを学ぶことである ——

吉田松陰



吉田 松陰〔よしだ しょういん〕 天保元年－安政6年（1830－1859）
長州藩士で幕末の志士。萩の松下村塾で子弟の教育に従事し、明治維新の原動力となる多くの逸材を輩出。

江戸幕末、多くの青年が長州藩士・吉田松陰の教えを請い、松下村塾（現山口県萩市）に集いました。

松陰の熱意溢れる指導を受けた塾生たちは、後に明治維新をうちたてる大きな原動力となったのです。

“人としていかに生きるべきか”

これは松陰が掲げた学問の基本理念の一つです。

「人生八十年」といわれる現代社会では、生活の多様化に伴い心の豊かさや生きがいのための学習需要が増しています。さまざまな学びの機会が設けられることで、老若男女問わず多くの人材が活躍できる環境が整えられました。

理想の自己実現を果たし、社会で居場所を見つけ豊かな人生を送るためにも、高い志をもって努力を怠らず、自らの才能を伸ばしてゆくことが肝要といえます。

修学習業

勉学に励み職業を身につけましょう

智能啓発

知識を養い才能を伸ばしましょう

徳器成就

人格の向上につとめましょう





よろづよ

萬代の國のしづめと大空に

あふぐは富士のたかねなりけり

—— 永遠にゆらぎない国の栄えの象徴として、

いつも大空にあおぐのは富士山のあの気高いすがたである ——

明治天皇



日本一の霊峰・富士山を仰ぐとき、そこにゆるぎない日本の姿をみる心地がします。

古来、我が国は集団で決められた物事やルール（のつと）に則り、秩序ある社会を築いてきました。幕末には欧米列強から不平等条約を強いられましたが、決してそれらを反故（はじ）にすることはなく、むしろ明治天皇が発せられた「開國の御沙汰書」にあるように「宇内（うだい）（＝世界）之公法ヲ以（もつて）」各国との交流に努めました。

さらに、諸外国との国力の差を痛感した明治政府は、西洋の技術を積極的に導入して殖産興業（しよくさんこうぎょう）を推進。人々の努力と探求心によつて、我が国は列強諸国と肩を並べるまでの成長を遂げたのです。躍進の背景には日本人の勤勉さや強い向上心、私より公を重んじる奉仕の心がありました。

これらには富士山の佇まい（たふまゐ）に象徴されるような、気高い心意氣（うかが）を窺い知ることが出来ます。

私たちには、先人たちが培ってきた麗しい国柄（うらわ）を受け継ぎ、後世へと伝えてゆく責務があります。

この国が永遠に栄えてゆくこと――

それは、国の未来を託した先人たちの思いに応えることでもあるでしょう。

公益世務

広く世の人々や社会のためになる仕事に励みましょう

尊法

法律や規則を守り社会の秩序に従いましょう

義勇

正しい勇氣をもつて国のため真心を尽くしましょう

明治 ミニコラム

「欧米人が見た明治の日本」

イギリスの詩人であり東洋学者のエドウィン・アーノルド（一八三二―一九〇四）は、明治二十二年（一八八九）に来日し、慶應義塾の教鞭も執りました。彼は日本の生活を通じて、日本人の親切さや礼儀正しさに感銘を受け、国民の徳の高さを讃えた欧米人の一人です。

ある日、アーノルドが街に出ると、欧米諸国や他のアジアの国々にはない特異な光景が、いたるところで目に留まりました。人々は皆、互いに微笑み合いながら深々とお辞儀をし、朝は「おはようございます」、夜であれば「こんばんは」といった丁寧な挨拶を交わし、別れ際になると再び頭を垂れながら「さようなら」と声を掛けるのです。彼は、これを「きれいな挨拶が空気を満たす」と表現し、「優雅さと明白な善意を示していて魅力的だ」と記しています。古来、礼節を重んじてきた日本人の風習。私たちにとってはごく自然なもので、当時の欧米人には新鮮に映り、清々しさすら覚えるものであったのでしょう。

さらに目をやると、子供たちは街路のあちこちで独楽や羽根つきなどを楽しみ、大人ですらそれを妨げないように通行していました。大人たちは、たとえ他家の子供であろうが大切に可愛がり、慈しみの眼差しを以てその成長を見守っています。アーノルドが「街はほぼ完全に子供たちのものだ」と感じ、初代駐日英国外交官のオールコックや大森貝塚の発見で知られるモースが「子供の樂園（天国）」と記録したように、我が国は子供たちの笑顔で溢れていたのです。

この「日出る国」ほど、やすらぎに満ち、命を蘇らせてくれ、古風な優雅が溢れ、和やかで美しい礼儀が守られている国は、どこにもほかにありません。

アーノルドが滞在した約一年半の間、我が国が彼に与えた驚きと癒しには計り知れないものがありました。

世界から認められた「徳」のある国、日本―。

この国に生まれたことを誇りに思いませんか。

およそ一五〇年前の日本。

近代国家の礎を築いた明治時代に思いを致すことは、慌ただしい日常生活で忘れがちだった優れた品性や道德意識などの「伝統的な徳」を考える上で、非常に大きな意味を持つでしょう。

行き過ぎた個人主義により人と人、個人と社会とのつながりが希薄化している現代社会において、ひとりでも多くの日本人が先人たちの示す普遍的な心を取り戻すことができるよう、心から願っています。

多くの先人から受け継いだ美しい国、日本。

この国を子々孫々、未来へ守り伝えるのは

「私」であり「あなた」です。

教育勅語は明治二十三年（一八九〇）に頒布された、我が国における教育の基本方針を示す明治天皇の勅語（おことば）です。時代を超えて語り継ぐべき徳目を、わずか三一五字に凝縮した言葉―。

その内容を改めて読んでみると、現代に通用する人生訓であることに気付くとともに、私たちが本当に大切にすべきことは、今も昔も決して変わらないことがわかります。

教育勅語に記された徳目を読み返すことで、自分自身を見つめ直すきっかけとなれば幸いです。

教育勅語（意識）

国民の皆さん、私たちの祖先は、国を建て初めた時から、道義道徳を大切にすると、という大きな理想を掲げてきました。そして全国民が、国家と家庭のために心を合わせて力を尽くし、今日に至るまで美事な成果をあげてくることができたのは、わが日本のすぐれた国柄のおかげであり、またわが国の教育の基づくところも、ここにあるのだと思います。

国民の皆さん、あなたを生み育てくださった両親に、「お父さんお母さん、ありがとう」と感謝しましょう。兄弟のいる人は、「一緒にしつかりやろうよ」と、仲良く励ましあいましょう。縁あつて結ばれた夫婦は、「二人で助けあつていこう」と、いつまでも協力しあいましょう。学校などで交わりをもつ友達とは、「お互い、わかっているよね」と、信じあえるようになりましょう。また、もし間違つたことを言つたり行つた時は、すぐ「ごめんなさい、よく考えてみます」と自ら反省して、謙虚にやりなおしましょう。

どんなことでも自分ひとりではできないのですから、いつも思いやりの心をもつて「みんなにやさしくします」と、博愛の輪を広げましょう。誰でも自分の能力と人格を高めるために学業や鍛錬をするのですから、「進んで勉強し努力します」という意気込みで、知徳を磨きましょう。さらに、一人前の実力を養つたら、それを活かせる職業に就き、「喜んでお手伝いします」という気持ちで公に世のため人のため働きましょう。ふだんは国家の秩序を保つために必要な憲法や法律を尊重し、「約束は必ず守ります」と心に誓つて、ルールに従いましょう。もし国家の平和と国民の安全が危機に陥るような非常事態に直面したら、愛する祖国や同胞を守るために、それぞれの立場で「勇気を出してがんばります」と覚悟を決め、力を尽くしましょう。

いま述べたようなことは、善良な日本国民として不可欠の心得であると共に、その実践に努めるならば、皆さんの祖先たちが昔から守り伝えてきた日本の美徳を継承することにもなります。

このような日本人の歩むべき道は、わが皇室の祖先たちが守り伝えてきた教訓とも同じなのです。かような皇室にとつても国民にとつても「いいもの」は、日本の伝統ですから、いつまでも「大事にしていきたい」と心がけて、守り通しましょう。この伝統的な人の道は、昔も今も変わることのない、また海外でも十分通用する普遍的な真理にほかなりません。

そこで、私自身も、国民の皆さんと一緒に、これらの教えを一生大事に守って高い徳性を保ち続けるため、ここで皆さんに「まず、自分でやってみます」と明言することにより、その実践に努めて手本を示したいと思います。

明治二十三年（一八九〇年）十月三十日
御名（御実名）睦仁・御璽（御印鑑）天皇御璽

― 一般財団法人明治神宮崇敬会刊『たいせつなこと』より ―

神道政治連盟

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1丁目1番2号

TEL.03-3379-8282 FAX.03-6629-8321

www.sinseiren.org/